

## 「本郷家住宅」案内説明文

これから見学していただく「本郷家住宅」について、以下のとおり、前もって簡単な説明を加えておきます。

- 1 本郷家住宅は、この町で規模が一番大きい「古民家」ですが、大まかに分けると、別々の時代に建てられた四つの建物からなっています。
- 2 内蔵は幕末から明治初頭にかけて（1860年代後半）、主屋は明治の半ば過ぎ（1900年）、味噌蔵は大正時代（1921年）、洋館は昭和初期（1928年）に建てられたものです。
- 3 けやきや黒柿など、高価な木材をふんだんに使い、随所に優れた意匠が施されているので、文化財的価値が高いと評価されています。
- 4 その昔、角間川が雄物川舟運の中継地として繁栄し、財を成した家が幾つもあった、本郷家もその一つでしたから、このような豪華な建物を建てることになりました。この家は、角間川の繁栄の「遺産」なのです。
- 5 明治14年、明治天皇の東北ご巡幸の折、本郷家をご宿泊所を務めました。往時の角間川、そして、本郷家の繁栄ぶりが想像されます。
- 6 本郷家は、江戸時代の元禄期のころ（18世紀初頭）から9代にわたって続いてきましたが、明治・大正期には県内屈指の大地主のひとつとなりました。中央公論の校閲部長を務めながら中央の詩壇で活躍した、詩人本郷隆は、7代の三男で、ここが生家です。
- 7 戦後の農地改革により多くの地主は収入が断たれることになりました。そのため本郷家でも、広大な屋敷地の維持管理に大変ご苦勞をなされておりますが、現在まで大切に保存しておられます。なお、奥の座敷は、当主（9代元氏）の奥様が茶道の指導などにも利用しています。

# 「本郷家住宅」の概略

## 1 建物築造の時期

内蔵（着工）	慶応 3 年（1867 年）	5 代	吉右衛門の時代
（完成）	明治 2 年（1869 年）		
主屋	明治 33 年（1900 年）	6 代	吉右衛門の時代
味噌蔵	大正 10 年（1921 年）	7 代	吉右衛門の時代
洋館と塀	昭和 3 年（1928 年）	7 代	吉右衛門の時代

内蔵は、幕末に着工されたものなので、当地方における江戸時代（末期）から近代（明治・大正・昭和初期）の各時代ごとの様式を今日に伝えるそれぞれ特色のある建物が揃っていることになる。幕末期の戊辰戦争、明治期の舟運隆盛期、大正から昭和初期の華やかな時代。いずれも、この町が繁栄した往時の歴史を今に伝える貴重な「遺産」である。

## 2 建築様式等

それぞれの時代に、基本的には伝統的な和風建築の様式（但し洋館は和洋折衷）により建てられた「近代和風建造物群」である。けやき、黒柿などの高価な材がふんだんに使われ、随所に材の良さが際立つ簡潔な意匠が施されており、文化財的価値が高いとの評価を受けている。

主屋の東側の三つの和室は総称して「奥」と呼ばれ、一番北側の和室が「座敷」（上座敷）である。座敷（上座敷）には、床の間、書院、床脇が設けられ、高い天井には畳大の鏡板が張られ、二重回し縁（まわしぶち）、黒柿の格縁（ごうぶち）でまとめられている。欄間には、高い天井に合わせた黒柿縁の大きな箴欄間（おさらんま）が付けられている。天袋、地袋の扉は「金地に松」を描き「黒柿」の縁が付く。

いずれの設（しつら）えも、用いた材の良さが際立つ簡素な意匠としつつ、漆と金箔の明るさを添えた上品な意匠が施されているなど、当地方に現存する近代和風住宅の書院を代表する秀作のひとつといえよう。

また、南側の和室に設けられた円窓（えんそう）や、茶道の高い資格を持っていた 6 代当主が、道具などを見ても、ここで茶道や華道を嗜んでいたことが推察される（座敷に切られた炉は、当主夫人が設けたもの）。

内蔵の外壁は、本来、漆喰の白壁が美しい「土蔵」であったが、大正 3 年（1914 年）の強首地震（秋田仙北地震 M7.1）で土壁が一部崩落したため、更なる崩落を防ごうと全面をスレート板で覆った結果、現在の姿になった（7 代当主の時代）。



### 3 庭園

本郷家の庭園に関しては、明治期から大正期にかけ東京の芝公園（紅葉谷）をはじめ、秋田の千秋公園など全国に優れた公園や庭園を多数残した、近代造園の祖とも称される造園家「長岡安平」による庭園設計図が残されている。

なお、国指定名勝の旧池田氏庭園も長岡安平の作である。

本郷家の造園（作庭）における長岡の具体的な関与の部分については、現在のところ史料等では明らかとなっていないが、現存する庭園の地割（流れを基調とした回遊式庭園）、石造り景物の配置など長岡安平による庭園設計図と共通する部分が随所にみられる。屋敷後方（北西部）に計画された中島を配する池泉回遊式庭園については、未完となった（現在は杉林となっている）。

## 本郷家の歴史（概略）

- 1 本郷家の歴史をまとめた「本郷家七代物語」（8代本郷太郎執筆）などの史料によると、推定では、18世紀初頭つまり元禄のころ、横手城下の郊外「本郷」集落から「庄兵衛」なる者が角間川の能登屋市兵衛方に奉公に来たが、何年か働くうちその勤勉さが認められて、能登屋を引き継ぐような形で独立した。

この庄兵衛が初代本郷吉右衛門で、七代まで「吉右衛門」を襲名してきた。「本郷」の苗字は、初代の出身地に由来する。

- 2 本郷家は、当初は小さな商家であったが、しだいに家勢を伸長させ、やがて雄物川の舟運の事業に乗り出していった。

江戸時代から明治時代半ば過ぎまで、雄物川でも舟運が盛んに行われていたが、角間川は、この雄物川が流れ下る区間のほぼ中間の地点に当り、古くから「川港」が設けられている。河川の水量（水深）の関係から、土崎港とを行き来する大船と更に上流にも行ける小舟との間で荷物の積み替えが行われるなど、雄物川舟運の重要な中継地（雄物川流域最大の中継「川港」）として大いに繁栄した。

角間川には、この繁栄の中で財を成した家が幾つもあったが、本郷家もその一つで、舟運に関連して多角的に事業を展開し、更に、逐次小作地を拡大するなどして、この地域有数の資産家に成長した。

- 3 角間川、そして、その中での当家の繁栄ぶりを如実に示すものとして特筆されるのは、明治14年（1881年）9月、明治天皇の東北ご巡幸の折、角間川がご宿泊地として選ばれ、本郷家が「行在所」（あんざいしょ）を務めたことである。行在所の建物は当局の指示により直ぐに取り壊されたが、明治天皇がお座りになった場所に「御座所」（ござしょ）と称する四角い石を置いており、この付近に行在所となった建築物が存在していたことが分かる。

- 4 本郷家は、明治38年の奥羽本線開通により舟運が廃れた後も、広大な小作地の経営により家勢を保ち続けていたが、戦後の農地解放により大きな収入の手段を絶たれることとなった。7代吉右衛門の晩年のことである。

戦後、角間川町は千年の歴史を刻む「平鹿郡」を離れ大曲市と合併となる。昭和中期の復興期以降においては戦後の当主となった8代本郷太郎氏が、長きにわたり大曲市議会議員・議長を務めるなど地元角間川のみならず大曲・仙北地方の発展に大きく尽力した。本郷家の地域貢献は、現在まで連綿と続

いている（なお、詩人本郷隆は、7代の三男）。

## 明治天皇の東北ご巡幸

「明治維新」により時代が大きく変わって、日本が、幕府が治める国から天皇を中心とする国になりました。西暦 1868 年が明治元年に当たりますが、その年から明治天皇の時代、つまり明治時代が始まりました。

新しい時代を切り開いていくため、明治天皇は、何年もかけて全国各地をお回りになりましたが（ご巡幸という）、明治 14 年（1881 年）には、北海道と東北をご巡幸されました。

北海道からの帰り道、青森県から秋田県に入り、秋田市（当時・秋田町）から県南地区を通り、院内峠を超えて山形県に向かわれています。ご巡幸は、国道を通るのが普通です。以前は、大曲市街地から追分を経て六郷に向かう道が国道でしたから、角間川は、この国道から少し外れています。

ところが、明治天皇のご巡幸に際しては、わざわざ追分から寄り道をする形で、9 月 19 日、角間川にお立ち寄りになり、本郷家を「行在所」（あんざいしょ）としてご一泊されました。そして、翌朝、また追分まで戻ったうえ、六郷を経て横手に向かわれています。このようなコースを取ることは、六郷から反発がありましたが、それなのに角間川が「行在所」として選ばれたのは、それだけこの町が栄えていて、実力があつたからでしょう。

本郷家（6 代の時代）では、「行在所」を務めるための建物を新築しましたが、当局の指示による手直し分も含め 5 千円かかったと伝わっています。その建物は、間もなく取り壊されて残っていませんが、天皇がお座りになった位置に「ご座所」として四角い石が置かれています。

当日、家族全員が親戚に退避して、この建物を天皇と側近の宿所として提供しました。お供の役人や政治家（先発隊を含めたため約 350 人）は、町内の 30 軒余の家々に分宿しています。町を挙げての大イベントでした。

（備考）この書面は、小学生のための説明文を少し手直ししたものである。

## 7代 本郷吉右衛門 翁

～角間川と本郷家の最盛期を築いた先人（1879年～1950年）～

- 1 明治12年11月、6代吉右衛門（留松）とその妻マツの長男として出生した。幼名は「吉次郎」である。

明治25年に旧制秋田中学校に入学したが、角間川では最初のことであった。明治30年に同校を卒業しているが、その前年の明治29年8月31日夕刻、中学5年生の夏休みが終わって人力車で秋田市に帰る途中、「六郷地震」（陸羽地震M7.2）に遭遇した。車夫が「目が回る」と言うので、さては「当たった」（脳卒中）のかと思ったのが地震だったと語っていた。

- 2 明治33年、主屋上棟の年でもあるが、妻ジュン（数えて15歳）を娶った。ジュンは、角館の士族君田貞之助（石黒家の出）の二女である。

- 3 日露関係が緊迫する時代、再々招集されて軍人としての途を歩むことになるが、明治37年に日露が開戦するや、陸軍少尉として戦地に赴いた。朝鮮半島北部日本海側の元山に上陸、更に満州との国境に近い「會寧」まで進軍したが、凱旋に際してその西方二里の地にある「雲淵」碑を石摺り（拓本）にして持ち帰り、それを掛物として残している。また、後に自らを「雲淵」と号して書道に励んだ。

明治38年、陸軍中尉に昇進して凱旋するが、「東郷さんが勝ってくれたお陰で帰って来られた」と述懐していた。東郷元帥直筆による書が「扁額」として残っているのも、その故であろう。

- 4 明治38年つまり凱旋の年、6代の隠居に伴って家督相続をし、ここに7代吉右衛門となる。以来、家業を取り仕切り、昭和初頭、50歳のころまでは、家勢の隆盛を維持し続けた。

その間、美術品の収集にも力を注ぎ、蒐集家としてその分野でも名を成した。

※所蔵美術品については、経営に携わっていた五業銀行破綻整理に関する債務負担（無限責任社員）により、昭和初期にその多くを手放している。



## 詩人 本郷 隆

～藤村記念「歷程賞」を受賞した郷土の詩人（1922年～1978年）～

- 1 本郷隆は、大正 11 年 7 月、7 代吉右衛門とジュンの三男としてこの家で生まれた。長兄に太郎（8 代）、二つ年上の次兄に充雄がいる。次兄の充雄は、海軍航空隊の操縦士で、残念ながら昭和 19 年 10 月、沖縄近海付近を偵察中搭乗機が帰還することなく戦死している。隆には、ほかに二人の妹もいた。
- 2 隆は、角間川尋常小学校を経て、昭和 10 年に旧制秋田中学校に入学したが、当時から学業では秀才の誉れ高く、剣道でも二刀流を得意とした。若いときから無類の読書家であり、絵や音楽の才もあった。  
やがて、金沢の旧制第四高等学校（四高）に進む。ちなみに、四高の剣道場が金沢から愛知県犬山の「明治村」に移築されているが、そこには「本郷隆」の名前も掲げられているという。
- 3 昭和 18 年、四高を卒業して東京帝国大学文学部心理学科に入学するが、その年の秋、学徒動員により陸軍に入隊した。内地勤務の航空整備兵で、終戦時は陸軍少尉だった。終戦から数日以内に復員して帰郷し、しばらく滞在したが、翌年早々に上京して、東大に復学した。  
おそらく、東大在学中の夏休みに帰省した折と思われるが、花巻に高村光太郎を訪ね、そのとき貰った「詩とわ不可避なり」という書が残っている。
- 4 昭和 24 年中央公論社入社。詩人になりたかったが、長兄らから「詩では食っていけない」とたしなめられて入社試験を受け、約 2,000 人の中から一人だけ採用された。会社では校閲部に属していたが（最後は校閲部長）、その傍ら、草野心平ら著名な詩人達との交流を深めながら、詩作や詩を論じる著作に情熱を傾けた。詩集「石果集」の刊行により、昭和 46 年、詩の世界では最高峰とされる藤村記念「歷程賞」を受けている。
- 5 他方、郷土への思いも深く、作曲の佐藤長太郎先生とコンビで校歌等の作詞を手掛けている。地元の角間川小学校校歌の作詞をはじめ、その数が大仙市内を中心に十指を超える。なかでも氏の作詞による大曲中学校校歌「よく生きよ 若人よ」は大作として知られる。